

家族を頼れない 子どもたちの自立支援

～「家族を頼れない子どもたち」を支えるための「実践」と「行政施策」～

子どもたちがいる学校でがんばれなかつたときには、問題行動を起こす場合があるかも知れない。そのときに教育の場である学校でどのように受け入れ、どう接していくのか。子どもたちに本来備わつてゐる力を掘り起こして、発揮するような場であつてほしい。

2点目は「進学」についてである。子どもたちが頼れる大人がいないことや学力の問題もある。ただ、が

私たちが取材を通して大切にしてきたのは子どもは何か悪くない。一人でも優しい目線をむける人が増え、何も手を貸さない。支援の輪が広がることで、うまいかなかつた場合、犯罪に手を染めたり、自殺を絶つケースなどもある。そうした子どもたちを少しでも減らすための中長期的な支援制度、施策が必要である。

どもいるが、子どもの生活上の課題があることが多い。しかし、教職員の対応には限界がある。その時に児童相談所や福祉事務所など福祉の分野との連携協力というのは不可欠となるからである。また、児童生徒の置かれた環境に生活面からアプローチすることによって自立支援を支えていく。これがSSWrにはもとめられている。

SSWrは学校現場ではある。

そのようなことを支え続けるのは、行政の仕事・役割だと思っている。すべての子どもたちが当たり前の生活を送れるように、支援していくために学校、福祉、教育行政がともに力を携えていけたらという思いで、SSWrを全中学校区に配置し、努力しているところである。

学校としてどれだけともに、子どもたちとかかわるかは大きな課題だと思っている。

ちにも余裕ができて全体もすごく落ち着いた雰囲気になつた。子どもたちの不安や根本的な部分は解決できているわけではないので、引き続き子どもたちに寄り添つていくことが大事である。生活指導の立場からも、SSWrは一つ相談ができる場所ができ、武器が増えたような感じで認識している。学校の教職員の中には、SSWrをうまく活用しきれていない現状があると感じている。

安全・安心に暮らしていくようになります。しかし、今から何をしていかなければならぬのかを考えながら支援の組み立てをおこなっている。より効果的・効率的に今の状況を改善していく同じチームとしてSSW'rを受け入れてもらうと負担は分散し、結果的によりよい支援につながると思う。より早い段階での介入・改善にむけて就学前の子どもたちや保護者にかかわることが今後の課題である。

りしたら失敗だし、何よりも子どもが傷つく。本当に地道な活動をしないと数字に反映させてはいけない。里親の認知度を高めて、「里親になって育てる」ということを親御さんにも知つて、だいて信用してもらいたい。育つてきた環境や様なしないどい思いを全部ひくるめて、生みの親のことを考え、そしてその子と生付き合っていくというが里親だと思つてゐる。

2019年度 施設で生活する子どもたち支援 実践交流集会

問題提起



12月14日にラッセホールで、どもたちの自立支援「家族を100人を越える参加があつた。今年度の集会は、住友剛さん戸新聞記事「木もれ陽のなかで」から報告を受け、河合優哉さん二ティホームルピナス高砂施設養育里親)のそれぞれの立場か

るで、2019年度「施設で生活する子どもたち支援実践交流集会」が「家族を頼れない族を頼れない子どもたち」を支えるための『実践』と『行政施策』をテーマに開催された。西篤志さん（京都精華大学）をファシリテーターに、二部構成でおこなわれた。第一部では、「かで」を執筆された岡西篤志さんと土井秀人さんから問題提起を受けた。第二部では、「いて」をテーマに木戸理恵さん（兵庫県健康福祉部少子高齢局児童課）から、「スクール、全中学校区配置」についてをテーマに新谷浩一さん（兵庫県教育委員会義務教育課長）、丸山野徹さん（加古川市立平岡小学校）、大野誠さん（神戸市立道場小学校）、半羽利美佳さん（武庫川女子大学准教授）、遠藤行博さん（支援研究会研究所施設長）からコメントをいただいた。（以下、各報告者の発言【要旨】を掲載）

い子
任し、
養育の体制整備の基本的
考え方や全体像を明記した
えたな計画を策定する。
具体的には「里親等
委託の推進にむけたとら
み」において、国が乳母
の子どもの里親委託率を
75%まであげる目標を掲
てているが、県としては現
に合った委託率を目標と
して設定することになる。

面 小学校の在園児減少による登下校や教室での安心感の確保が課題である。神戸新聞連載記事は、子どもたちの現状をより深く知る良い機会となつた。教職員の入れ替わりが激しいからこそ、ファイリングした記事を着任者に読んでもらつたり、学園への訪問をおこなつたりと、尼崎学園と密

参加者の声

西宮市教職員組合

西宮市教職員組合
高橋藤一郎

参加者の声

11月24日から1週間、いわき市の救援ボランティアに全国の連合の仲間と参加しました。いわき市内には泥のついた家財道具が外に積まれた家、畳や床を外したものままの家がまだまだ多く見られました。私たちがボランティアに入った地域は川が近く、家屋には大人の育丈ほどどの位置まで浸水の跡がありました。また流れてきた大量の泥や岩、藁などが家の周りに残っていました。先遣のボランティアによって家屋内の泥はほとんど出されており、私たちは壁や床に残った泥を洗い流したり、使えなくなつた家財や家の周りの泥・藁を集積場まで運んだりしました。屋内の泥は高圧洗浄機で洗い流ましたが、電源や水道が止まっている地域ではブラシでこすり落とすしかありませんでした。片づけ・洗浄が終わつた家は、大工さんが入り、修理が始まっています。しかし、一方ではボランティアの要請は社会福祉協議会への自己申告のため、手続きがかねてから始まっています。しかしながらではボランティアの要請は社会福祉協議会への自己申告のため、手続きが分かれずにとり残されている高齢者もあると聞きました。社会福祉協議会は人が少なく、他県から応援が来ました。社会福祉協議会は人が少なくて精一杯です。社協の人も本当はすべての家を訪問して、ニーズを聞きたいとして、二、三杯を話されていました。今後もボランティアを募集していくそうです。また、これらは経済的な支援が必要となります。ボランティアから帰ってきた今も、これから自分たちに何ができるかを考えています。



▲現地の様子

台風19号被災地 救援ボランティア